

帝国議会議録における文末思考動詞

渡辺由貴

【キーワード】 と思う と考える 文末表現 推量表現 モダリティ

1. はじめに

中世には(1)のようにト格内部に願望・意志表現をとることが多かった文末表現「と思う」が、近代以降(2)のようにト格内部に判断・叙述の表現をとり、推量表現的に使われる例が増加した(渡辺 2007ab, 2011 等)。

(1)鎌倉へくだって、頼朝にあふて、物ひと詞言はんと思ふぞ。(『平家物語』<覚一本>下 p.299)

(2)だから理づめほど、こわいものはねへと思ふヨ。(『安愚楽鍋』p.67)

このように文末表現「と思う」が森山(1992)の<不確実表示用法>(「と思う」の内部が客観的な情報)を獲得し、それが定着した近代には、「と存ずる」「と考える」等、文末思考動詞の多様化もみられる。北原(1982, p.151)は、平安時代と現代における推量表現の変遷について、一語による総合的な表現が、いくつかの語を重ね用いる分析的な表現になっていること、平安時代の推量表現が助動詞による主体的表現であるのに対して、現代語は客体的表現によるところが多く、「だろう」のかわりに「…と推察する」「…と想像する」「…と思う」等の表現がよく用いられることを指摘している。これらの表現の使用状況について具体的には明らかにされていないが、近代語の文末思考動詞のバリエーションをみることは、そのような現代語への流れの一端をみることにつながると思われる。

文末思考動詞は、場面や文体により出現の仕方が異なり、自らの考えを述べる際に多く使われることもその特徴の一つである。そこで近代の口語資料であるが、日常会話と異なり論理的な意見を述べる公的な場での口語であり、思考動詞の状況をみる上で重要な資料である帝国議会議録を調査し、どのような文末思考動詞が使用されているかをみていく。

2. 資料と方法

帝国議会議録とは帝国議会全会期(明治 23 年 11 月～昭和 22 年 3 月)の本会議・委員会の速記録である。国立国会図書館が公開している「帝国議会議録検索システム」を利用した。帝国議会議録のうち、今回は貴族院の本会議を対象とし、その回次の 1 号が 1890 年、1900 年、1910 年、1920 年、1930 年、1940 年にあたる回次を選び、その回次の

2号・5号・11号を調査した。ただし、第一五回（1900年）の11号は分量が少なく、用例が4例のみであったため、次の12号を対象とした。

モダリティ形式としての文末思考動詞をみるため、仁田(1991)等の先行研究に従い、「文末でト格をとり、発話者主体で非過去・非否定」に該当する用例を考察対象とした。ただし、「とします」「と思うのだ」等、敬語助動詞や終助詞、指定表現が後接しても推量表現の場合推量の意味を失わず、「と思う」自体の分別に影響を及ぼさないと考えられるため同等に扱う。「と思う」以外の文末思考動詞についても同様とする。

なお現代の国会会議録に関しては、速記録から会議録への編集過程で、字句整理作業が行われる。青山(1989)によると、言い誤り、脱落等軽微なものに限り整理をするとされているようであるが、松田編(2008,p.54)には現代語の議事録の「整文規準が不明確なもの」の例として「お聞きしたいです。→お聞きしたいと思います。」と整文された例があがっている。帝国議会議録についても同様に、発言したことばがそのまま文字化されているとは限らないが（諸星 1986 等）、仮に同時代的に軽微な修正が加えられていたとしても、当時の公的な場での口語を反映した言語資料であることに変わりないと考えられる。

3. 帝国議会議録における文末思考動詞

帝国議会議録における文末思考動詞について、【表1】に回次・号ごとの各表現の用例数と、参考のため各号の文字数の概数を示した。

【表1】回次・号ごとの各表現の用例数

		と思う	と存ずる	と考える	と信じる	と認める	その他	計	文字数(概数)
第一回 (1890年)	2号	20	5	2	1	2	1	31	19000
	5号	45	20	15	0	1	2	83	45200
	11号	47	9	21	2	5	2	86	54700
第一五回 (1900年)	2号	18	0	1	2	0	0	21	14100
	5号	22	0	1	0	1	0	24	22800
	12号	12	2	2	1	4	0	21	14100
第二七回 (1910年)	2号	1	6	0	0	8	0	15	44300
	5号	1	0	1	0	11	2	15	19000
	11号	16	1	4	0	19	0	40	43200
第四三回 (1920年)	2号	40	15	9	2	1	2	69	33700
	5号	19	1	3	0	0	1	24	13700
	11号	75	18	54	6	1	6	160	73900
第五八回 (1930年)	2号	38	4	4	2	1	1	50	24300
	5号	27	7	4	2	9	1	50	27900
	11号	10	6	10	0	18	1	45	19900
第七六回 (1940年)	2号	4	6	6	1	3	6	26	21500
	5号	8	2	2	1	1	1	15	14700
	11号	1	5	0	1	13	0	20	25300
計		404	107	139	21	98	26	795	531200

※引用における例は数に含めていない。

「と思う」の他、「と存ずる」「と考える」「と信じる」等、様々な種類の思考動詞による文末表現がみられ、これらが固定した表現として定

着していたことがわかる。なお「その他」には、「と思われる」「と考えられる」「と確信する」「と判断される」「と判断する」「と記憶する」「と認定する」「と信ぜられる」「と思考する」「と心得る」が含まれる。

【表1】をみると、1890年から1940年の50年間で、文末思考動詞の使用傾向が大きく変化しているということはないようである。しかし文末思考動詞の使用状況は回・号ごとに差がある。これは、会議の分量の多寡も影響するが、意見書案や報告等の文語文には文末思考動詞が出現しないため、これらが多い号では、用例が少なくなることも関係している。例えば第二七回2号は、文字数でみると44300字程度と比較的多いが、この号の大半(35800字程度)は「商法中改正法律案」(p.22～)等の朗読となっているため、議論が交わされている部分の分量は少ない。

なお、帝国議会議録において文末思考動詞のバリエーションが多く出現している理由として、この時期に文末思考動詞が定着しつつあるということに加え、同一話者の発言が長くなった際、文末の表現が単調になることを避けるために様々な文末表現を使用している可能性もある。例えば、(3)は富田鐵之助の一続きの発言であるが、その中に「と確信する」「と思う」「と存ずる」「と考える」が使われている(下線は筆者)。

(3)其要領ハ理由書ニ記シテ置キマシテ併セテ谷君ガ御演説ガゴザイマシタニ就キマシテ此建議ノ趣意ハ委シク御分リニナツテ居リマスルコトと確信イタシマス、(中略)、私ドモハ帝國ノ政府ハ病人トハ考ヘラレマセヌ誠ニ健全ナル政府デゴザイマスと思ヒマス、(中略)、尤モ加藤君モ此精神ハ同意デアル只病人デ無イカラ建議シナクツテモ宜イト云フ御議論デアツテ大體ハ御不同意ト云フノデハ無イト存ジマス、(中略)、いぎりすガー國ヲ護養イタシタノモー大事件デゴザイマセウと考ヘマス、(中略)、何レノ國デモ同シコトデ決シテ自然ニ任セテ國ノ發達シタモノハナカラウと思ヒマス、(第一回5号 p.64～65)

4. 各文末表現の特徴

ト格内部を「意志・願望」「推量・疑問」「判断・叙述」の3つにわけ、各文末表現の特徴を考察する。用例の後に、回次・号・頁・頁内の位置(上/下、もしくは何段目か)・発話者を示す。用例内の下線は筆者による。また、漢字や記号等を一部現代語の表記に改めたところがある。

4. 1. 「と思う」の特徴

文末思考動詞の中で、最も多くみられるのが「と思う」である。ト格の内部は、意志・願望、推量・疑問、判断・叙述のいずれもみられる。

■意志・願望+と思う の例

以下のように説明を求める際や、これから自分の意見を述べることを

表わす等、議論を進行する際に使用されている例が多い。

(4)本人ガ希望イタシテ居ッタト云フ證據ガアリマスナラバ、其點ヲ擧ゲテ御説明ヲ願ヒタイト思フ、(四三回 5号 p.96 下 湯浅倉平)

■ 推量・疑問＋と思う の例

妥当性や必要性を述べる例、未来の事態を推測する例等がみられた。

(5)餘り當然スギルコトデアラウト思ヒマス、(一回 5号 p.6 下 加藤弘之)

「推量・疑問＋と思う」の場合、助動詞「だろう」等がすでに推量の意味をあらわしているため、「と思う」自体に推量の意味があるとは言い難く、森山(1992)でも「不確実なこととしての把握を表す形式があらかじめ存在する以上、そこに、同種の不確実を表す形式(話し手の判断を表示する形式)が重出することは考えにくい」(p.110)ことから、このような表現は「願望＋と思う」等と同様に「主観明示用法」とされている。しかし、「推量・疑問＋と思う」全体で一つの推量表現形式となっているとみることもでき、「推量・疑問＋と思う」は、「意志・願望＋と思う」と「判断・叙述＋と思う」の中間的な位置づけともいえよう。

■ 判断・叙述＋と思う の例

未来の事態を推測する例や過去を回想する例、当為表現の例、物事への評価・判断を述べる例等がみられた。

(6)元鐵道敷設法ニ確カアッタト思ヒマス、(四三回 11号 p.28 上 元田肇)

(7)寧ロ私ドモハ政府ノ意見ノ方ガ國家經濟ノタメニ宜イト思フ、(一五回 12号 p.130 上 都築馨六)

【表2】「と思う」の用例数

	意志・願望	推量・疑問	判断・叙述
第一回	16	61	35
第一五回	8	26	18
第二七回	5	8	5
第四三回	20	68	46
第五八回	15	32	28
第七六回	2	1	10
計	66	196	142

【表3】「と存ずる」の用例数

	意志・願望	推量・疑問	判断・叙述
第一回	2	15	17
第一五回	0	0	2
第二七回	3	1	3
第四三回	7	7	20
第五八回	7	3	7
第七六回	7	2	4
計	26	28	53

4. 2. 「と存ずる」の特徴

「と存ずる」のト格の内部にも、意志・願望、推量・疑問、判断・叙述のいずれもみられる。「と存ずる」は「と思う」の丁重表現とされるが、用例(3)でみたように一続きの発話の中で「と思う」「と存ずる」ともに出現する例もあり、このような例では聞き手との関係によって使い分けているというより、同じ文末表現を繰り返して単調なることを避けるために「と存ずる」を使用している可能性がある。また調査範囲内において「と存ずる」を使用する話者のうち、「と思う」を一度も使用

しない話者もおり、「と存ずる」の使用に関しては、話者によるところも大きいようである。

■意志・願望+と存ずる の例

(8)併シ當席ニ登リマシタコトデゴザイマスカラ終リニー言ヲ致シテ置キタイト存ジマス、(一回2号 p.28上 山口尚芳)

■推量・疑問+と存ずる の例

(9)本員ノ考ヘル所デハ此外交問題ニ就テノ尤モ急要ナル事件ト謂フモノハ此治外法權ヲ撤去スルト謂フコトガ第一ノ問題デアラウト存ジマス、(一回5号 p.68上 尾崎三良)

■判断・叙述+と存ずる の例

(10)是ハ所謂我憲法ノ精神ヲ擁護スル上ニ於テ大切ナル事柄ト存ズル、(四三回2号 p.29上 仲小路廉)

4. 3. 「と考える」の特徴

「と思う」に次いで用例数が多く、ト格の内部は、「と思う」「と存ずる」同様、意志・願望、推量・疑問、判断・叙述のいずれもみられる。

■意志・願望+と考える の例

(11)今日ハ時間モ切迫イタシテ居リマス故ニ「ニコラエウスク」ノ問題ニ付テ當局大臣ノ御説明ヲ求メタイト考ヘマス (四三回2号 p.35下 男爵阪谷芳郎)

(12)本日ハ大分時間モ經チマシタカラ、諸君ニ於テ御異議ガナケレバ、是デ延會ヲ致サウト考ヘマス (四三回11号 p.305下 議長・公爵徳川家達)

内田(2008, p.40)は「～と思う」の機能の一つとして「②表現者(話し手・聞き手)個人の意志・願望に対して、聞き手・読み手に配慮してやわらげて表示する。」をあげ、「(5)では、これから乾杯の音頭をとらせていただく(○思います/×考えます)。「(6)(論文で)今後もこの研究を進めていきたい(○思う/×考える/×考えられる/×思われる)。」等の用例を示し、「～と考える」はこの機能を持たないとしている。これは、「と考える」が「と思う」と異なり、論理的思考によることを示す表現であり(柴田他1979では「オモウ」と「カンガエル」の違いを「オモウ〈心の中で〉〈ある対象のイメージ(感覚・情緒)を意識する〉〈直観的・情緒的〉」「カンガエル〈頭の中で〉〈ある対象について知力を働かせる〉〈過程的・論理的〉」(p.111)と説明している)、思いつきや個人的な願望・意志を表示しにくいためであると考えられる。しかし、帝国議会議録には「意志・願望+と考える」の例が少なくない。帝国議会議録における「意志・願望+と考える」の用例をみると、私的な希望を述べたものではなく、いずれも延会や説明を求めるといった議会進行のための意見を述べたものである。私的な思考であるというニ

ュアンスをもつ「と思う」よりも、公的で改まった言い方として、共有すべき意志や願望を「と考える」と表示しているのだと思われる。

■ 推量・疑問＋と考える の例

(13)是ハ大多數ノ意見デハナイカト考ヘマス、(二七回 11号 p.139 下 伊澤修二)

■ 判断・叙述＋と考える の例

(14)日本今日ノ商人ハ微力デアルト考ヘマス(一五回 12号 p.129 上 瀧 兵右衛門)

なお廣澤金次郎は、四三回 11号において 29回「と考える」を使用している。この他の思考動詞の使用をみると、「と思う」5例、「と存ずる」1例、「と思われる」2例で、これらに比べて「と考える」の使用が多く、「と考える」の使用についても話者によるところがありそうである。

【表4】「と考える」の用例数

	意志・願望	推量・疑問	判断・叙述
第一回	2	14	22
第一五回	1	0	3
第二七回	1	1	3
第四三回	15	19	32
第五八回	3	6	9
第七六回	0	1	7
計	22	41	76

【表5】「と信じる」の用例数

	意志・願望	推量・疑問	判断・叙述
第一回	0	2	1
第一五回	0	1	2
第二七回	0	0	0
第四三回	0	1	7
第五八回	0	0	4
第七六回	0	0	3
計	0	4	17

4. 4. 「と信じる」の特徴

「と信じる」は、現代の会話においてはそれほど多く使われないが(5. 3. の【表9】参照)、帝国議会議録ではその使用が少なくない。「遠からず」「決して」「當に」「急務」等の語とともに、強い確信や信念を述べる際に用いられている例が多い。ト格内部に意志・願望をとる例はみられず、説明を求めたり議事を進行したりする際には用いられないようである。

■ 推量・疑問＋と信じる の例

(15)遠カラズ其安定ヲ見ルデアラウト信ズルノデアリマス、(四三回 2号 p.24 上 國務大臣原敬)

■ 判断・叙述＋と信じる の例

(16)現下内政ノ急務デアルト信ズルノデアリマス、(七六回 2号 p.10-3 國務大臣近衛文麿)

4. 5. 「と認める」の特徴

大半は議長・副議長が議事進行の場面で、「御異議ないと認めます」「過半数と認めます」の形で使用している例である。ある立場からの判断をあらわす表現であるという点で、他の文末思考動詞とはやや性格を異にしている。現代の国会議事録においても議事進行の表現として「と認め

る」がみられ(5. 3.)、国会における定型的な表現であるとみられる。

(17)此案ハ是レデ終局ト認メマス、(一回 5号 p.78 上議長・伯爵伊藤博文)

(18)過半数ト認メマス、(一回 11号 p.164 上議長・伯爵伊藤博文 他)

(19)御異議ナト認メマス、(二七回 2号 p.21 上議長・公爵徳川家達 他)

【表6】「と認める」の用例数

	意志・願望	推量・疑問	判断・叙述
第一回	0	0	8
第一五回	0	0	5
第二七回	0	0	38
第四三回	0	0	2
第五八回	0	0	28
第七六回	0	0	17
計	0	0	98

【表7】「と思われる」の用例数

	意志・願望	推量・疑問	判断・叙述
第一回	0	1	2
第一五回	0	0	0
第二七回	0	0	0
第四三回	0	4	1
第五八回	0	1	1
第七六回	0	1	1
計	0	7	5

4. 6. その他

上記の他、「と思われる」「と考えられる」「と確信する」「と判断される」「と判断する」「と記憶する」「と認定する」「と信ぜられる」「と思考する」「と心得る」の文末表現がみられた。これらはいずれも推量・疑問、判断・叙述をト格内部にとり、推量表現的に使用されている。

「と思われる」は12例みられた。以下のような用例があった。

■推量・疑問＋と思われる の例

(20)國語ニアル所ノ國力ヲ見ナケレバ、往々ニシテ見誤ルコトガアラウト思ハレマス、(七六回 5号 p.46-4 田中館愛橘)

■判断・叙述＋と思われる の例

(21)其便利デアアル所ヲ缺イテ窮屈ヲ與ヘテ不便ニスルノハ得策デナト思ハレル、(一回 11号 p.169 下 加藤弘之)

「と考えられる」は今回の調査の範囲では、ト格の内部は判断・叙述のみみられた。二七回に2例、四三回に1例の合計3例である。

(22)然ルニ其期間内ト雖モ事件ノ取扱ヲ停止セネバナラスト云フ格段ノ理由ハ無イト考ヘラレマス、寧ロ平常ノ如クニ事件ヲ取扱ヒマシテ訴訟ノ進行ヲ圖リマスコトガ機宜ニ適シタル處置デアルト考ヘラレマス、(二七回 5号 p.61 上 政府委員河村讓三郎)

「と確信する」はト格の内部に推量・疑問をとる例が1例(四三回)、判断・叙述をとる例が2例(一回・五八回)の計3例みられた。

(23)又露西亞ニ致シテモ相當ナル政府デアリマシテ、國際上ノ大義ヲ考へ、列國ノ間ニ情誼ニ重キヲ置ク政府デアリマスレバ、必ズ我國ニ満足ヲ與ヘルデアラウト確信スルノデアリマス、(四三回 11号 p.298 上 國務大臣原敬)

「と判断される」は、今回の調査の範囲では、ト格の内部は判断・叙

述のみみられた。2例とも七六回2号における東條英機の発言である。

(24)又今日彼ノ軍ノ裝備ノ不良ナル、給養ノ悪化ハ甚ダシキモノガアルト判断サレルノデアリマス、(七六回2号 p.14-2 國務大臣東條英機)
「と判断する」「と記憶する」「と信ぜられる」「と思考する」「と心得る」は1例ずつみられた。以下にあげる。

(25)其ノ實際的効果ハ、我ガ輸入路ノ封鎖強化等ヨリ見マシテ大ナルモノハナイト判断スルモノデアリマス、(七六回2号 p.13-4 國務大臣東條英機)

(26)其急ナ線路ガ何時カラ始マッテ居ルカ、是ハ確カ十一年度カト記憶シマス、(四三回11号 p.276 上 中村是公)

(27)敵ノ困窮ハ日ト共ニ甚ダシキモノガアルト信ゼラレマス、(七六回2号 p.14-2 國務大臣東條英機)

(28)日佛提携ノ必要ヲ認識シタカラニ外ナラヌト思考致シマス、(七六回2号 p.12-1 國務大臣松岡洋右)

(29)然レバ源ガ涸レタ以上ハ流れ出マシタ第十三條モ自ラ消滅イタサネバナラヌ譯デアルト心得マスル、(第一回11号 p.182 穂積陳重)

なお、【表1】には含めていないが、矢代書記官朗讀の建議案に「と認定する」の例が1例あった。

(30)帝國議會ノ貴族院ハ帝國ノ産業ヲ護養シ且帝國々庫ノ歳入ヲ増益センカ爲メ海外ヨリ輸入スル商貨ニ對シ帝國ノ情勢ニ適應ナル程度ヲ量リ海關稅ヲ増課スルヲ以テ最大必要ノ事件ト認定ス、(一回5号 p.60 下)

5. 他の資料との比較

ここで同時期の資料である程度テキスト量のある国定国語教科書(文字の概数:1178400字)と夏目漱石作品(同:2514300字)および現代の国会会議録と比較し、帝国議会議録の文末思考動詞の特徴をみる。

5. 1. 国定国語教科書との比較

国定国語教科書については、「第一期から第六期までの国定国語教科書に見られる思考動詞による文末表現としては、「と思う」(106例)「と存ず」(23例)「と思われる」(5例)「と考える」(2例)「と存ぜられる」(1例)「とおぼゆ」(1例)「と考へられる」(1例)」「(渡辺2012, p.2)および「と信じる」(1例)がみられるという状況である。ただし会話文(『国定読本用語総覧』の凡例に従って判断した)の用例は、「と思う」が59例(引用を3例含む)、「と存ずる」が10例、「とおぼゆ」が1例であり、会話文では帝国議会議録の方が多くのバリエーションがみられるといえよう。

(31)ミヤコ へ 行ッテ、エライ 人 ニ ナリタイ ト 思ヒマス。

(第四期 卷三 十五 一寸ボフシ)

(32)「(略)はなはだですぎたことかもしれませんが、このかんしゃの氣持を、あらわしたいとぞんじます。みなさん、いかがでしょう。」はくしゅが四方からおこった。(第六期 卷七 四 汽車の中)

(33)「敵、前後をさへぎつて、御方は陣をへだてたり。今は、のがれぬところとおぼゆるぞ。(略)」(第五期 卷十二 十二 菊水の流れ 湊川の戦)

5. 2. 夏目漱石作品の会話文との比較

【表8】夏目漱石作品会話文の各表現の用例数

作品	年	と思う	と存ずる	と考える	と信じる	と認める	その他	文字数(概数)
吾輩は猫である	1905	17	0	0	0	0	3	312400
趣味の遺伝	1906	1	0	0	0	0	0	37400
坊っちゃん	1906	7	0	1	0	0	1	86800
草枕	1906	1	0	0	0	0	0	82500
二百十日	1906	3	0	0	0	0	0	28900
野分	1907	13	0	0	0	0	0	91500
虞美人草	1907	8	0	0	0	0	0	194200
坑夫	1908	1	0	0	0	0	0	138100
三四郎	1908	5	0	0	0	0	0	160100
それから	1909	11	0	0	0	0	0	172100
門	1910	1	0	0	0	0	0	136400
彼岸過迄	1912	10	0	0	0	0	0	189800
行人	1912	4	1	0	0	0	0	217000
こころ	1914	6	0	0	1	0	0	158000
硝子戸の中	1915	1	0	0	0	0	0	51500
道草	1915	6	0	0	0	0	0	143400
明暗	1916	14	0	0	0	0	0	314200
計		109	1	1	1	0	4	2514300

帝国議会議録に出現した文末思考動詞について、夏目漱石の作品の会話文における出現数を調査したところ、「と思う」が最も多く、他は「と思われる」が2例、「と存ずる」「と考える」「と信じる」「と認められる」「と心得る」がそれぞれ1例ずつみられるのみであった。「と存ずる」は手紙文、「と考える」「と信じる」「と思われる」等は地の文や手紙文にみられるものの、会話文では帝国議会議録ほどの文末思考動詞のバリエーションは認められない。(37)に「と考える」、(39)に「と認められる」、(40)に「と心得る」がみられるが、これらは会議や演説に準ずるもので、日常の会話文としてはやや特殊なものであるといえよう。

■「と思う」の例

(34)「そうですか。私はまた生きてて人に笑われる位なら、一層死んでしまった方が好いと思います」(『明暗』)

■「と思われる」の例

(35)「(略)西洋では昔時から写生を主張した結果今日のように発達したものと思われる。さすがアンドレア・デル・サルトルだ」(『吾輩は猫である』)

■「と存ずる」の例

(36) 「(略) こうして御目に掛れるのももう二度とない御縁だろうと思
いますから、どうぞそれだけ聞かして頂いた上心持よく御別れが致し
たいと存じます」と云った。(『行人』)

■ 「と考える」の例

(37) 「只今一寸失念して言い落しましたから、申します。当夜の宿直
員は宿直中外出して温泉に行かれた様であるが、あれは以ての外的事
と考えます。(略)」(『坊っちゃん』)

■ 「と信じる」の例

(38) 「あなたから過去を問いただされた時、答える事の出来なかった
勇気のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと
信じます。(略)」(『こころ』)

■ 「と認められる」の例

(39) 「(略) 旧約全書を研究してみますと所謂ハンギングなる語は罪人
の死体を釣るして野獣又は肉食鳥の餌食とする意義と認められます。
(略)」(『吾輩は猫である』)

■ 「と心得る」の例

(40) 「(略) 私は以上の理由で寄宿生一同を厳罰に処する上に、当該教
師の面前に於て公けに謝罪の意を表せしむるのを至当の所置と心得ま
す」と云いながら、どんと腰を卸した。(『坊っちゃん』)

国定国語教科書および夏目漱石の文学作品の会話文ではもっぱら「と
思う」が使用されているのと比較すると、帝国議会会議録では「と存ず
る」「と考える」「と信じる」「と認める」等の使用も多い。文末思考動
詞のバリエーションが多いのは、会議における発話に特徴的な傾向のよ
うである。議会では意見を述べる文が多い。同じ文末表現を繰り返して
単調になることを避けたり、思考のニュアンスを細かく伝えたりするた
め、文末思考動詞に多くのバリエーションが出やすいこと、また、「と
考える」「と信じる」「と考えられる」等、その動詞の持つ論理性や信念
というニュアンスから日常会話では使用されにくい思考動詞が、あらた
まった場面では使われやすいこと等がその背景にあると考えられる。

5. 3. 現代の国会会議録との比較

【表9】現代国会会議録の各表現の用例数

	と思う	と存ずる	と考える	と信じる	と認める	その他	計	文字数(概数)	
第一八三回 (2013年)	2号	11	1	20	0	3	0	35	26600
	5号	25	0	10	0	0	0	35	34000
	12号	12	8	11	0	3	2	36	45700
計	48	9	41	0	6	2	106	106300	

現代の国会会議録での文末思考動詞をみってみる。2013年の2号・5
号・12号(11回は文字数900字程度で少ないため)を調査した。

■ 「と思う」の例

(41)慎重な議論のためにはむしろ的確な決断であったと思います。(第一八三回 12号 横山信一)

■「と存ずる」の例

(42)質疑はなおございますが、これを次会に譲りたいと存じます。(第一八三回 2号 議長 平田健二)

■「と考える」の例

(43)民主党はその内容をしっかり精査、吟味していきたいと考えます。(第一八三回 2号 岡崎トミ子)

■「と認める」の例

(44)御異議ないと認めます。(第一八三回 2号 議長 平田健二)

■その他の例(※2例とも「と思われる」の例)

(45)こうした状況下で固定費を増大させる給与引上げは、企業にとって非常に厳しいことと思われます。(第一八三回 12号 川合孝典)

なお、上記の3つの号には入っていないが、2013年中の12号までの参議院本会議において、文末表現「と信じる」の用例も1例みられた。

(46)皆さんの社会での活躍が日本の新たな活力を生み出すと信じます。(一八三回 8号 安倍晋三)

現代の国会会議録、帝国議会議録ともに「と思う」「と考える」の出現が多く、議長の議事進行の際に「と認める」を使用する点等をみると、既に現在の傾向と近いものが明治期に確立していたようであるが、現代の国会会議録では「と存ずる」がやや少ない印象を受ける。「と存じます」を用いずとも、「と思います」の形で丁寧さをあらわすことができるため、その形に収束していったと考えるが、この点については今後調査したい。

6. おわりに

帝国議会議録には、「と思う」「と存ずる」「と考える」を中心に、文末思考動詞が数・バリエーションともに多くみられる。近代語資料の中でも特に帝国議会議録において、これらの表現が広がりを見せていた。また一方で、議事進行に関わる表現として、文末思考動詞がある種定型的に用いられているものもあり、この点は会議録に特有の傾向であろう。

また、「と信じる」「と思われる」「と判断される」等、ト格内部に判断・叙述の表現をとり、推量表現的に用いられる文末思考動詞のバリエーションが多く、文末思考動詞による推量表現が多様化し定着していることがわかる。近代には「と思う」の推量表現的な用法が定着したのと同時に、「思考動詞による文末表現」という表現形式自体が定着し、現代に至っているとも言えよう。近代において分析的傾向(田中 1965)が進み、推量の助動詞が「う」「だろう」等に収束されつつある一方、文末思考動詞が多様

化することでより細かく思考のニュアンスを伝えられるようになったとも考えられる。今後は文末思考動詞と推量の助動詞との関係についても検討したい。

【参考文献】

- 青山學司(1989)「会議録作成に携わって一字句の整理を中心として」『立法と調査』152
- 内田浩(2008)「論理的文章の中の『と思う』類と『と考える』類」『日本語・日本文化研究』14
- 北原保雄(1982)「動詞性述語の史的展開(3)叙法」川端善明他編『講座日本語学2 文法史』明治書院
- 柴田武・國廣哲彌・長嶋善郎・山田進・浅野百合子(1979)『ことばの意味2 辞書に書いてないこと』平凡社
- 田中章夫(1965)「近代語成立過程にみられるいわゆる分析的傾向について」近代語学会『近代語研究第一集』武蔵野書院
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 松田謙次郎編著(2008)『国会会議録を使った日本語研究』ひつじ書房
- 森山卓郎(1992)「文末思考動詞『思う』をめぐって一文の意味としての主観性・客観性一」『日本語学』11
- 諸星美智直(1986)「国語資料としての帝国議会議事速記録一当為表現の場合一」『国學院大學大学院紀要』17
- 渡辺由貴(2007a)「『と思う』による文末表現の口語性—近代の論説文を中心に—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊』52
- 同(2007b)「『と思う』による文末表現の展開」『早稲田日本語研究』16
- 同(2011)「中世における文末表現『と思ふ』と『と存ず』」『早稲田日本語研究』20
- 同(2012)「国定国語教科書における文末思考動詞」『日本語学研究と資料』35

【資料】

- 小林智賀平校注『安愚楽鍋』1967 岩波書店
- 梶原正昭他校注『新日本古典文学大系 平家物語上・下』1991・1993 岩波書店
- 「帝国議会議録検索システム」(http://teikokugikai-i.ndl.go.jp/TEIKOKU/swt_startup.html)・「国会会議録検索システム」(<http://kokkai.ndl.go.jp/>)
- 海後宗臣編『日本教科書大系近代編』第6・7・8・9巻 1963・1964 講談社
- 国立国語研究所編『国定読本用語総覧』1・2・4・6・8・10・12 1985・1987・1989・1991・1993・1995・1997 三省堂
- 『新潮文庫 明治の文豪』CD-ROM